

仏心に出あう

鈴木専章

母方の祖母が亡くなりそうだという知らせを受けたのは、午後11時30分をまわった頃でした。愛知県豊明市にある藤田保健衛生大学病院到着までおよそ一時間。高速道路を走る中、「もう今にも亡くなります」というので「強心剤を打ちましょうか」との連絡が入りました。

一刻も早く到着したいと思っていたので、強心剤を打つことにありがたいと思う反面、我々の勝手な思いで、自然に死んで逝けない。これまで何度も呼吸が止まり、もう充分苦しんできたのにまだ苦しめるのかという罪悪感がありました。

病院に到着し集中治療室に入り、最初に出た言葉は「ありがとう」でした。「遅くなりました」でもなければ「どんな具合ですか」でもなく「ありがとう」でした。瞳孔（どうこう）は開き、機械でようやく息をしている弱り果てた身体は、体重わずか25キロになっていました。そんな祖母への精一杯の言葉でした。

わが身の勝手な思いで、自分が行くまでは生きていてほしい。そんな勝手な願いがありました。しかし、病院に着いた後には、今度は逆にもうこれ以上苦しめないでほしい、楽になってほしい、そう思ってしまったことに、深く重い罪悪感を感じました。機械で息をしている祖母を前にして、自然と手が合わさりました。自然とこぼれ出た「ありがとう」は、待っていてくれた祖母にだけではない、病院の先生やスタッフの方々、その場にいた人、皆に対してのものでした。

幼い頃から私を可愛がり、いつも孫である私をまもってくれた。目の奥から熱くなってきて、目の前が自然とゆらぎ、自分の意志とは関係なく、悲しみとともに涙がこぼれ出ました。

あらためて、私の周りを見渡すと、ベッドの周りを幾人かで囲んでいました。その瞬間、ふと祖母の姿が仏さまのように感じられ、今まさにここが法の間だと気づかされました。私に残してくださる、最後のご説法なのだ。

初孫であった私が生まれた時には、病院で立ち合い喜んでいと聞いていました。そんな祖母が今亡くなろうとしている。そう思い返したとき、私はこの人の孫として生まれ今日までご縁を頂き、40年の年月を経てここまで導いて下さった。最後に「ありがとう」という感謝と共に、いつしか口から「なんまんだぶつ」のお念仏をとнаえておりました。いつもお念仏をとнаえていた祖母と「先に行って待ってるから、あとでゆっくりおいで。」そんな風にお念仏を通して会話をさせてもらったような気がします。最後のご説法で、報恩感謝のお念仏に出会わせてもらえました。

後日、見つかった晩年の日記には、毎日のように、周りの者へ感謝の言葉と、今日も保育園が無事であったことへの感謝の言葉が記されていました。その瞬間、曾我量深先生の「われわれは知らなくても仏に願いをかけられ 望みをかけられておる」という言葉が思い出されたことです。私の知らないところで、私たちを案じてくださっていたこと、願いがかけられていたこと、祖母に頂いたご縁が、尊いご恩となって仏心に出あわせて頂きました。祖母の称えていたお念仏が思い起こされ、あらためて頭が下がり、自然と両手が合わさったことでした。

南無阿弥陀仏